

故きを温ねて⑤

百年前の盛儀

明治四十四年 法然上人七百年御忌
 大正二年 浄運寺開創七百年

平成二十三年(二〇一一)に法然上人八百年御忌、平成二十五年(二〇一三)に浄運寺開創八百年の記念すべき年を迎える。この百年に一度の勝縁にあたって、当山では記念事業、行事実施を發願、長期計画に基づいて取り組んできた。それでは百年前、法然上人七百年御忌、開創七百年を迎えた当寺は、どのような記念事業、行事を実施したのだろうか。

法然上人七百年御忌は明治四十四年(一九一一)、浄運寺開創七百年は大正二年(一九一三)、住職は第四十三世元誓徳雄上人代だった。記念事業としては、明治四十一年の本堂茅葺き屋根葺き替え工事を嚆矢として、開山堂、仁王門、庫裡屋根を葺き替えた。書院、本堂渡り廊下も改築している。柱の腐朽により倒壊した鐘楼は、裏庭から現位置へ移して大正二年に改築された。寺大門は第一義石塔から井上町通りまで延長を計画、途中の明照門建設が大正七年、大門入り口に法然上人七百年御忌記念碑が大正九年四月に建てられ

て、開通を果たした。ちなみに現大門は地番が大字井上字南町二三八五、地目公衆用道路、地積二八四二平方メートル、所有者浄運寺である。

記念行事は、明治四十三年十一月二十日から二十八日まで五重相伝並びに本堂屋根葺き替え入仏法要、四十四年四月十三日から十九日まで当山法然上人七百年御忌を執行、大正二年四月一日から十日まで開創七百年記念法要並びに五重相伝を執行した。下の写真は、そのいずれの法要の練り行列か不明だが、百年前の盛儀がうかがえる。五重相伝とは浄土宗の教えを五つの順序にしたがって伝える法会、昔はしばしば行われていた。

法然上人七百年御忌、浄運寺開創七百年当時は日露戦争後の物価高騰で、事業費が当初予算の六割増になったと記録に残る。思えば現本堂、庫裡の再建も天明大飢饉直後であった。七百年記念事業は、檀信徒有縁の皆様のお力によって困難を乗り越え、見事円成した。(小林覚雄)



百年前の当山法要練り行列。練元井上青木勘左工門(現青木秀雄)氏宅北側の道路で、人力車に僧と役員が乗って出発を待つ